

# 研究テーマ

・ディベート活動を中心とした表現力の育成 ～聞き手を意識したスピーキングと論理構成の向上を意識しながら～

## 研究テーマに対する具体的な取組の内容

取組①意見を考える際、様々なツールから意見の根拠を探し、自分の意見に一貫性や説得力を持たせる活動の徹底  
 取組②普段の授業からスピーキングの即興性を高める活動の導入(リテリング活動の充実とラウンド制を使った授業実践)

定量的評価に用いたデータ  
 ①意識調査(アンケート)→生徒(鳥取県独自調査&ディベートに関する本校独自アンケート)、教員(小中学校課からのアンケート)  
 ②GTEC→卒業生について入学時からの推移  
 ☆各技能ごとのCEFR.A2またはB2の生徒割合の推移 ☆ライティング観点別評価「構成・展開」の平均点推移

### 取組より得た学び

**☆取組①に関して**  
 ・本校における「ディベートキャンプ」における三仙真也先生(福井県立藤島高校)の指導。「ディベートで1番大切な部分は立論だて」→即興性が全てではない。少なくとも立論をしっかり考えることがディベート成功のカギ

**☆取組①に関して**  
 ・令和4年度授業改善研究会において山下美朋先生(立命館大学生命科学部)の指導。「準備型のディベートと即興型のディベートは指導法も評価方法も異なるもの」→準備型のディベートでは、パフォーマンステストはある程度覚えさせたプレゼン的な内容で、プレゼンはスピーキングの基礎。  
 ・即興型のディベートは、テーマも身近で背景知識がなくてもできるトピックで。

**☆取組②に関して**  
 ・令和3年度授業改善研究会において戸田行彦先生(滋賀県立守山中高)の指導「即興性を高めることは普段の授業の中で」→「音声(Listening)→文字(Reading)→内在化(音読)」の流れの再確認。

### 取組より得た成果

**☆鳥取県独自調査より**  
 ・3年生において、「英語の力が向上した」と答えた割合は87%

**☆本校独自調査より**  
 ・各学年において「ディベートにより英語の力が向上した」と答えた割合は、1年84%、2年84%、3年74%

**☆3年生GTEC推移より(総合点平均)**  
 ・総合点1年12月671(全国平均-60)→3年6月834(全国平均+25)。CEFR.B1以上0%→12.6%

**☆3年生GTEC推移より(Writing平均)**  
 ・これまで伸びが止まる傾向にあった期間である2年12月209(B1以上9.6%)→3年6月224(B1以上29.6%)。※前年度卒業生2年12月224(B1以上22%)→3年6月228(B1以上22%)

**☆Writing観点別評価「構成・展開平均」**  
 ・2年12月3.1→3年6月3.7。※前年度卒業生2年12月3.5→3年6月3.8  
 →論理構成に絞った考査問題を継続してきた成果?

### 今後の課題・方向性

**☆残された課題**  
 ①「ディベートで難しさを感じる」1番の理由に「反駁(カウンター)」と答えた生徒が多く、2.3年では最も多い回答であった。(1年57.8%、2年62.2%、3年62.6%)  
 ②4技能のうち音声面を苦手とする生徒がどの学年でも多い。(1年Listening30.6%,Speaking25.8%、2年Listening39%,Speaking29.8%、3年Listening27.6%,Speaking46.5%)  
 ③教員の意識調査では「本事業により小中高等学校の連携が進んだ」と答えた教員はそれほど多くない。



**☆上記課題に対して今後の取り組み**  
 ①に対して  
 →立命館大学山下先生より指導いただいたように、論題によって準備型で行いより論理構成を深めるか、即興型で行うかを検討し、活動を区別する意識の共有。  
 ②に対して  
 →低学年時からの音声指導方法のノウハウの模索と教員による共通理解。  
 ③に対して  
 →教員同士の連携だけでなく、児童生徒間同士の交流の機会を作り、直接児童生徒に還元できるようにする。

上記成果より、ディベートによる生徒の意識や英語力の向上、教員の目標の共有や指導力に対する意識の向上にある程度は効果があると考えている。